

# ハーディの自然と宇宙

## —哲学的瞑想詩をめぐって—

押 本 年 眞

### 序

トマス・ハーディの詩人としての業績は、900篇余の作品として結実した。文学者としての、いわば働き盛りの歳月を小説を書くことに費やした人にしては、詩人としての活躍にも驚くべきものがある。

さて、ハーディの多くの詩は、その扱われているテーマによって、批評家によりさまざまに分類される。ハーディには男女の愛の機微を表現したものが多く、「愛の詩」として論じられることがしばしばある。また、自然を扱った詩として、いくつかをまとめることも可能である。きわめて小さな生き物を中心に、具体的なイメージで、生命のはかなさを歌ったものも多い。たとえば、鳥や昆虫を扱った詩としては‘An August Midnight’、‘The Robin’、‘Winter in Durnover Field’ などがある。ハーディは、これらの詩において、ひとつの場所に多くの生き物が集まる偶然、生きていくことの厳しさ、はかなさなどをテーマとしている。‘The Blinded Bird’ はただでさえ生きていくことには困難が伴うのに、さらに人間の残酷な過酷な仕打ちに耐えて歌い続ける鳥への深い感動が表現されている。‘Shelley’s Skylark’ では、一羽の鳥に対する想いがロマン派の詩人に対するハーディの姿勢とともに示され、‘The Darkling Thrush’ では、季節外れの冬枯れの中で、元気よく高らかに歌い続けるツグミの様子に19世紀から20世紀に変わる節目にに対する詩人の想いが重ねられる。ハーディには、セキレイ、ウソと言った鳥を扱ったものもあり、鳥への深い関心がうかがわれる。

また、ハーディには、時や死や死後の霊について扱った詩も多く、そのような観点から分類することも可能で、そのいくつかが幽霊詩として一括して論じられることもある。

さらに、詩の表現形式との関連でみると、しばしばバラッド風の物語的要素の強い詩をものしている。‘My Cisely’などは、その典型といえよう。この物語詩の中には、詩人の先祖に関する言い伝え、逸話を題材とした興味深いものもある。詩人の踊りが大変好きであった先祖にちなむ、‘Dance at the Phoenix’、イングランド南部にナポレオン来襲の危険があった際の父方の祖父の行動にちなむ ‘The Alarm’ などがその例である。

さらに、詩人が生きた同時代の社会的事件に対する反応として、タイタニック号の沈没を扱ったり、ボーア戦争を中心に戦争に対する深い憂慮を表わした詩もある。時には、戦争詩 (war poems) という枠組みで彼の詩が論じられることもある。

## I

さて、小論では、「哲学的瞑想詩」という表現を用いたので、それによって、どのような詩をさすのかを最初に示しておきたい。ハーディには、詩集 *Poems of the Past and Present* を中心に、自然や宇宙のありようそのものを直接に扱った、特異な詩がいくつかある。ハーディの詩の批評家 J. O. Bailey はそのうちの ‘The Lacking Sense’、‘The Mother Mourns’、‘The Sleep-Worker’、‘God-Forgotten’、‘God’s Education’ を a philosophical dialogue of questions and answers とか philosophical fantasy あるいは philosophical sonnet と呼び、また ‘A Plaint to Man’、‘God’s Funeral’ という二つの詩を philosophical and religious meditation と評している。本論では、今挙げた詩に加えて、これらの詩を味わうために比較参照するのがよいとしばしば言及される詩、およびハーディ自身が ‘A Philosophical Fantasy’ と題したものを含めて、哲学的瞑想詩として扱いたい。そして、私が哲学的瞑想詩ととらえるものは、Paul Zietlow が

*Moments of Vision: The Poetry of Thomas Hardy* の第5章 ‘Philosophical Fantasies’ で取り上げている作品とほぼ、重なるものである。<sup>1</sup>

さて、これらの詩をとりあげるのは、ハーディのもっとも優れた詩と考えるからではない。総じてこれらの詩は表現はごつごつとしていて、必ずしも読みやすくなく、その内容は時にきわめて観念的である。小さな生き物の具体的なイメージを生かして深い印象を与える詩の方をより高く評価する読者が多いであろう。また、ハーディの物語詩は通俗的で余り優れたものではないとの評価もあるが、哲学的瞑想詩よりも分かりやすく楽しいという印象を持つ読者もあるであろう。

Samuel Hynesは *The Pattern of Thomas Hardy's Poetry* という著書でハーディの哲学的瞑想詩にあたるものの特徴と意義についてバランスのとれた示唆に富む論を、第3章の ‘The Uses of Philosophy’ で述べているが、詩の完成度からすればこれらの詩は成功しなかった詩 (unsuccessful poems)、拙い詩 (bad poems) であると評している。<sup>2</sup> また、比較的最近出版されたアンソロジーをみても、David Wright による Penguin Books の詩集 (1978) では ‘God’s Funeral’ と ‘The Mother Mourns’ のみが、この類の詩から選ばれているのみであり<sup>3</sup>、Longman から出た Tim Armstrong による *Thomas Hardy: Selected Poems* には、‘A Sign-Seeker’ と ‘Nature’s Questioning’ が含まれているのみである。<sup>4</sup> このような詩に対する批評家たちの価値判断がある程度うかがえよう。

さらに、これらの詩はハーディの思想、哲学を表わすものとして個々の詩がとりあげられることがある。その場合でも、ひとつの詩全体を批評するよりも、ハーディの「哲学」を説明するために部分が引用されることが多い。Herbert N. Schneidau が、*Waking Giants: The Presence of the Past in Modernism* (1990) において、過去の記憶の持つ意味という角度から、モダニストの作家、詩人との関連で ‘By the Earth’s Corpse’ を詳しく論じているのは異色とあってよい。<sup>5</sup> さきほど挙げた、哲学的瞑想詩に一つの章をあてて、これらの詩を詳しく論じた Paul Zietlow の批評は、やや珍しい例とって過言でな

い。

さて、以上のように、これらの詩は哲学的瞑想詩として批評家によってひとつの範疇に括られるのが通例である。しかし、さらにいわば下位区分として次のようにふたつのグループに分けられる。

I. 自然を問題とするもの	II. 宇宙を問題とするもの
37 'To Outer Nature'	30 'A Sign-Seeker'
43 'Nature's Questioning'	79 'At a Lunar Eclipse'
76 'The Mother Mourns'	83 'The Problem'
80 'The Lacking Sense'	87 'God-Forgotten'
82 'Doom and She'	89 'By the Earth's Corpse'
85 'The Sleep-Worker'	231 'New Year's Eve'
	232 'God's Education'
	266 'A Plaint to Man'
	267 'God's Funeral'
	884 'A Philosophical Fantasy'

(番号は *The Complete Poems of Thomas Hardy* edited by James Gibson による)

勿論、この分類は絶対的でなく、自然を問題とするものに含めた詩において存在の意味、神の摂理にあたるものが自然界にあるだろうかという問いがふくまれると宇宙と絶対者を問題とするグループに近くなるものがある。たとえば、'Nature's Questioning' と 'The Lacking Sense' はそのような詩といえよう。しかし、ハーディの自然観の根本的な特徴を考えるのにも、彼が現実のキリスト教の教会の姿にきわめて批判的で、またキリスト教の教義それ自体も信じがたい立場にあるようでありながら、なぜ繰り返し小説と詩においてきわめて宗教的な問題をとりあげたのか、彼の考える神、宇宙とはどのようなものかという疑問を考えるのにも、この二つに分けることは、有効性を

持つのではないかと考える。小論では、もっぱら以上の詩のテキストそのものと、詩の内容に密接に関連する聖書の箇所、これらの詩に対する批評、およびハーディと同時代の文学者の書簡と先行した詩人の詩との比較に絞って論を進めたい。

## II

さて、第1グループの自然(nature)を問題とする詩の特徴は、その大部分で詩人が実際に自らの感覚でとらえた具体的な自然が取り上げられている点である。‘To Outer Nature’においては自然は「輝かしい光がなくなり、闇の中に色あせて」いるが、詩人は若き日に嬉々とした心で見た頃の美しい姿を再び見せて欲しいと切望している。‘Nature’s Questioning’は後半では随分と思弁的な詩へと展開するが、詩の始まりに出てくるのは、小さな池や野原、羊の群、さみしそうな樹木というイングランドのごくありふれた鄙びた光景である。‘The Mother Mourns’では Yell’ham-Firs という表現が第2スタンザにあり Yalbury の森での経験から詩は展開する。‘The Lacking Sense’では副題に Waddon Vale という地名があり、これはいわゆるハーディ・カントリーにある谷である。

‘Doom and She’ と ‘The Sleep-Worker’ では、詩人の実際の経験に基づく自然は出てこない。しかし、もっと重要な点では第1のグループの他の詩との共通点を持っている。ハーディは擬人法をよく用いると思われが、この第1グループの詩においてもその傾向は顕著である。自然はすべて擬人化されていて、その大部分では女性、‘Nature’s Questioning’では、学校で懲らしめられて座っている子供として表現されている。自然が女性として擬人化されている詩を連続して、よく読んでみると、どうやら自然も自然をつくり出す存在も女性であるようだ。そして、命を産み出す者は、母のイメージで表現されている。

しかし、これらの詩において「母」は具体的な個々の命を産む存在という

より、むしろ、詩人が見ている光景の中に次々と生命を産み出していく根源として、ある意味では豊穡な自然全体の源としての自然である。この自然は、ある時点で人間をこの世に創り出しその後、何世代にも亘って次々と人類を産み続ける力をも含んでいる。

自然は感覚的に捉えられる限り、ハーディにとってこのような「母」が最大の存在である場である。問題は、この「母」が、自然は、ひいては森羅万象は創造主たる神が創り給うた被造物であるというキリスト教的な自然観、宇宙観とはくいちがっている点にある。ハーディにとっては、感覚的に捉えうる有機的な自然はこの「母」によって産み出されるのであり、神が直接に働きかける存在ではない。神とこの「母」との間には「時」(Time)や「運命」(Doom)が介在しているために、自然の姿から神の存在を信じることはできない。たとえば、'To Outer Nature'では自然が時間の経過によって、詩人がかつて見た美しい、柔らかな輝きに満ちた姿ではもはやないことが、嘆かされている。自然は闇に捕らえられ、色あせてゆく。詩人はどうして、彼と自然が春の素晴らしい状態を永続的に続けることができぬのかと自問するが、これもまた問いかけというよりは嘆きである。この詩の第3、第4スタンザは自然と時との関係をかかなりはっきりと示している。

O for but a moment

Of that old endowment—

Light to gaily

See thy daily

Iris-hued embowment!

But such re-adorning

Time forbids with scorning—

∴ Makes me see things

Cease to be things  
They were in my morning

幼い時、若い時に大空を見上げた際の自然への想いを詠った詩として、この詩はワーズワースの‘My Heart Leaps Up When I Behold’を思い起こさせる。

My heart leaps up when I behold  
A rainbow in the sky:  
So was it when my life began;  
So is it now I am a man;  
So be it when I shall grow old,  
Or let me die!  
The Child is father of the Man;  
And I could wish my days to be  
Bound each to each by natural piety.<sup>7</sup>

ワーズワースの詩では「私」は虹を見ることにより、胸踊る感動を覚え、その感動が、キリスト教的な表現を借りれば、始めに在りし如く、今も後も続くことを、生涯の日々が、natural piety (生まれながらの敬虔さ)で結ばれることを願う。そして「子供は大人の父である」と宣言する。この詩には6行目の‘Or let me die!’のように非キリスト教的ともみえる表現もあるが、虹には次に述べるようにキリスト教的イメージの要素があることは否定できない。

これに対して、ハーディは、時の経過とともに自然は色あせ、「私」の心の中の喜びも衰えたと表現し、とりわけ「虹 (rainbow)」のことを iris-hued embowment とギリシャ神話の虹の女神を連想させる語句で表わし、目で見え

る自然の中に直接にキリスト教的神の存在を感じようとするワーズワースと一線を画している。

虹は次に引用した創世紀9章の洪水を生き延びたノアに対し神の祝福と契約が示される場面をコノテーションとして含んでいる。

And God said, This *is* the token of the covenant which I make between me and you, and every living creature that *is* with you, for perpetual generations:

I do set my bow in the cloud, and it shall be for a token of a covenant between me and the earth.

And it shall come to pass, when I bring a cloud over the earth, that the bow shall be seen in the cloud:

And I will remember my covenant, which is between me and you and every living creature of all flesh; and the waters shall no more become a flood to destroy all flesh.

Genesis. ix. 12-16. King James Version

ハーディが虹ではなく「虹色の弓のようなもの」とした意図が窺われる。

ハーディの自然観が一層端的にあらわれるのは、‘The Mother Mourns’、‘The Lacking Sense’、‘Doom and She’、‘The Sleep-Worker’である。‘The Mother Mourns’では夏には素晴らしく見えた自然の緑の作品も、今や牧場でも小道でも衰え、秋の半ばの夜に風が唸っています。針葉樹の茂みから聞こえてくる木の神が発する当惑し苦しんでいる声のような低い嘆きの中に、実は母なる自然そのものが「葬送歌のような繰り返し (dirge-like refrain)」を発しているのに気付く。人間が最近、自然は不完全なものだと言い立てて、自然は完全であるという昔からの名声を疑い、軽蔑するようになったのが、母なる自然の嘆きの原因である。人間は鋭い観察力、洞察力で自然の欠点を、昔の不

注意さの痕までも告げる (annunciate) ことを嘆いている。自然は、「人間は私が最も巧みに創った者」と思っているが、このような頭脳の広い把握力、明晰さを望んだわけではないと言う。天使がマリアに聖母になることを伝える受胎告知の際の動詞 *annunciate* をこのような詩で用いるのもハーディらしいといえよう。

自らが産み出した者が予想外の存在になり、支配していた筈の場の変容に嘆く今は無力な母の姿がこの後も繰り返し表現される。14スタンザでは、人間は、神々が自然に貸した材料と方法さえ自分たちに与えてくれたら、頭脳の方で ‘a creation/ More seemly, more sane’ を創り出し進化させることができるとさえ言いほす。この詩の終わりの方では、このような人間によって、生命が安易に失われ、環境破壊がおこっていることを示唆する部分もある。自然は、かつては制御力 (olden control) を地上に持っていたのに、もっとすぐれた、知的な者から称賛を得たいと望み、結局は油断して人間を増長させたことを悔やんでいる。知的な存在としての人間に辞書によれば「(しばしば皮肉に) 賢者」と定義<sup>8</sup>される the sage があてられていることも注目すべきであろう。

この詩は、非キリスト教的のようでありながらハーディの自然観の特徴がよく出ている。すなわち、自然はある時点において人格的要素を持ったなものかによって創られた存在、キリスト教的表現を使えば被造物であると捉えられている点である。問題は、自然の状態が生み出した母の意図(第10スタンザ, my intent) とはかけ離れていることにある。この詩には、kingdom, creature (6th stanza), teaching (13th stanza), creation (14th stanza), mysteries (16th stanza), pre-ordain (17th stanza) のように聖書的といってもよい語句が多く使われていることも、注目すべきで一概にキリスト教に対する皮肉な表現と言い切れないものを含んでいる。

次々と生命を産み出すが、その結果は当初の麗しいもの、完全な状態とはかけ離れた一種の混乱状態であることは、‘The Lacking Sense’, ‘Doom and She’,

‘The Sleep-Worker’では母のイメージとともに、自然を織りなす女として表現される。「母なる自然の指の触覚は極めて巧みで」近くで見る者は「おおいに驚嘆」する。彼女は「被造物すべての母であり／造形の巧みにかけては比類なき者」なのだが、「視力がない」と‘Doom and She’にある。‘The Lacking Sense’にも「彼女の眼球には視力がない」とある。そのために、母なる自然は一面では素晴らしい才能を持ちつつせつせと働いても、結果は、見事な模様が現れたり完成するに至らない。‘The Sleep-Worker’では、母なる自然は視力が不自由なのではなく、催眠状態に陥っているようである。彼女はせつせと働き続けているのだが、ぼんやりとした機械的な反復で創られたものは、fair growth (美しく育ったもの)と foul cankers (みにくい潰瘍)、正と邪、苦痛と恍惚の奇妙に入り混じった状態、全体としては、はっきりしたデザインもなければ、いつまでいっても完成のない状態を作り出しているのみである。母なる自然はこれまでの詩と同様に、この状態を見ることはない。このようなハーディの自然観は、同時代の19世紀末に Joseph Conrad が友人の Cunnigham Graham にあてた手紙に書いた、この世は「考えも、善悪の観念も、先見の明も、見る眼も、心情も持たないで」、なんの目的も、はっきりした刺繍模様があるかも分からぬまま、編み物を続ける巨大な a knitting machine が動いているようなものだ、という有名な一節と比較すると、ハーディの特質が一層よく分かり興味深い。

There is a—let us say a machine. It evolves itself ( I am severely scientific) out of a chaos of scraps of iron and behold!—it knits. I am horrified at the horrible work and stand appalled. I feel it ought to embroider—but it goes on knitting. You come and say: “this is all right; it’s only a question of the right kind of oil. Let us use this—for instance—celestial oil and the machine shall embroider a most beautiful design in purple and gold”. Will it? Alas no. You cannot by any special lubrication make embroidery with a knitting

machine. And the most withering thought is the infamous thing has made itself; made itself without thought, without conscience, without foresight, without eyes, without heart. It is a tragic accident—and it has happened. You can't interfere with it. . . .

It knits us in and it knits us out. It has knitted time space, pain, death, corruption, despair and all the illusions—and nothing matters. I'll admit however that to look at it is sometimes amusing.<sup>9</sup>

コンラッドにとっては自然と宇宙には乖離がなく、ハーディのように感覚的に捉え得る有機的な生命にたいしてのみ主として自然という言葉を使う傾向はない。ここには、嘆く母といったイメージとは全く異なる無機質な巨大な機械とも言えるものが世を支配している。機械であるので、当然、人間にとって無情、非情である。celestial oilを用いてもこの機械が美しいデザインの刺繍を編み出すことにならないと述べている部分にコンラッドの宗教への姿勢が窺われる。最後の文、とりわけ amusing という語には彼の人生に対する態度の一面がよく表れている。

### III

さて、第2グループの宇宙と絶対者の存在について扱った詩は、自然を扱った詩よりも一層観念的であり、対象のスケールは大きい詩としては拙い作品とっていいであろう。しかし、同じようなテーマにつき、このような特異な詩を繰り返し書かねばならなかったところに、自然科学が発達し、また世俗化が進むヴィクトリア朝にあってキリスト教についてこだわり続けたハーディの特色がある。

これらの詩では、共通して男性的な神が登場する。そして、地球とその上に住む者は人間をふくめて、かって、神によって創造され、地上の生物は、人間を含めてキリスト教的には被造物であるはずだということが問題になる。

しかし、これらの詩に出てくる神は決して力強く歴史の中に働く神ではない。それどころか、すでに非常に年老いて毫碌しているといってよい神で、批評家によっては false God と表現する者もあるほどである。‘God-Forgotten’ 「神に忘れられて」では、神は地球や人間を創造したことをすっかり忘れていて、人間に詰問されてやっと「かすかに記憶がもどって」くるような神である。それどころか、神の死について扱った ‘God’s Funeral’ 「神の葬儀」という詩さえある。

「神の死」が言われ始めた時代を反映した詩といえよう。しかし、詩のテキストをよく読むとハーディ自身が神は死んだとのみ、述べているとは思えない。これらの詩には複数の層が有るといえよう。その一つは、キリスト教はもはや信じ得ないと表現しているレベル、もう一つは、そのようには割り切れないハーディのこだわりが表現されているレベルである。この世は偶然、運命、無意味性のみが支配するようにみえるのだが、同時にそれを越えた価値がないものかとこだわらずにはいられない詩人ハーディ、何ものも信じ得ない状態よりは、信じ得る状態の方がよいと思っている詩人ハーディがこの後者のレベルでは顔を覗かせている。このレベルを読み取るのは、詩の語句、特に聖書に基づく表現のコノテーションに関心を払うときに可能であろう。

たとえば、‘At a Lunar Eclipse’, ‘By the Earth’s Corpse’ は、自然科学の発達に伴ってひろまった、地球は巨大な宇宙のほんの一部にすぎないとの認識が、月食を見ることにより、この世、人の世の小ささへの驚きとあいまって作られた詩、また天文学、地質学、生物学などの知見により、地球そのものにも終わりがあることを表わした詩である。これらの詩は、「創世紀」の天地創造神話がきわめて地球中心であること、時間的スパンが短いことの揶揄ともみえる。しかし、一面では、総てのものは神による被造物であるはずだというハーディのこだわり、割り切れなさが逆説的にあらわれているともいえよう。

本論で、第2グループの最初にあげた ‘A Sign-Seeker’ はグループのうちで、第一詩集 *Wessex Poems* からの唯一の詩で、神の力とその支配が人生におい

て実感しうるかを扱ったもので、余り観念的でなく第一グループの詩と比較しやすい。

この詩は、ひとつのレベルで読めば、詩人ハーディのペルソナともいうべき「私」が、自然の中に、宇宙に、人の世に神の力とその支配を示す sign (しるし)<sup>10</sup>を懸命に探したが、それを見出さなかった。信仰を持っているという人々が言うような天国などは信じ得ない。結局、「私」は、不可知論的で、最終行、「人は倒れたら地下に眠るのみ」と結論づけた詩と解釈できる。

And Nescience mutely muses: When a man falls he lies.

しかし、全く別のレベルの読みが可能である。ハーディほどの聖書をよく読んでいた人は、人間が意識的に、また神に挑戦的にしるしを求める時は、しるしは示されないと聖書にあることは熟知していたはずである。Paul Zietlow は、この詩を「ヨブ記」11章7節「あなたは神を究めることができるか。全能者の極みまでもみることができるか」と関連させて論じているのは適切で鋭い指摘であろう。

“Canst thou by searching find out God?” is the question put to Job by Zophar the Namanthite, and the answer, he implies, is a negative ( Job 11:7). Perhaps “A Sign- Seeker” is designed to show that the destiny of the obsessive searcher is an endless, futile quest. That is, even this poem may contain an element of ironic exposer qualifying its negative statement.<sup>11</sup>

上に引用された「ヨブ記」の部分には sign (しるし) という語は直接には表れないが、テーマ的にはつながっている。

また共観福音書にも、ファリサイ人がイエスにしるしを見せろと迫る場面で同様のことが述べられている。例えば、「マタイによる福音書」では次のと

うりである。

Then certain of the scribes and of the Pharisees answered, saying, Master, we would see a sign from thee.

But he answered and said unto them, An evil and adulterous generation seekes after a sign; and there shall no sign be given to it, but the sign of the prophet Jonas.

Matthew. xii. 38-39. King James Version

「ルカによる福音書」11章29節、「マルコによる福音書」8章11-12節にも同様のイエスの言葉がある。

さらに、聖書的表現に注目すると、次の点が指摘できる。この詩は、第1、第2スタンザでは、ハーディの身近な自然に対する個人的経験であるかのよように始まっているが、第3、第4スタンザでは、「私」は、もはや個人ではない。地球上のどこにでも出かけてゆく冒険好き、探検好きの人類、実証的な自然科学を究めてやまない人類をさしているようである。

Bailey は、ハーディが同時代の天文学者や生物学者の学説をよく読んで知っていたことが、この箇所反映していると述べている。

The discoveries listed in the third and fourth stanzas are not his discoveries, but he had read astronomers' conclusions as he had read the books of the biologists, and his poem speaks for all men of religious temperament who must accept demonstrable fact, however shocking, to be fact. The fact seems to deny not only the personal immortality promised by faith, but also the dream of ultimate justice to a world in which pain and evil are often triumphant.<sup>12</sup>

しかし、近代科学の持つ全てのものを数量化して実証的にとらえようとす

る傾向に対して、ハーディは、聖書的表現を微妙に利用している。第4スタンザの第3行に、いろんなことを学んで知るようになった例として、「空が含む塵を計量することも (To mete the dust the sky absorbs,)」とある。ここで、「測る、計量する」という意味で *mete* という動詞が使われている。この語は他動詞としては ‘to ascertain or determine the dimensions or quantity of = Measure v.2’ と定義があり、さらに、‘Now only poet. and dial., exc. in allusions to Matt. vii. 2’ と *Oxford English Dictionary* には説明が加えられている。参照した1933年に出た *OED* の定義、説明は1908年に出た *A New English Dictionary on Historical Principles* の定義、説明と同一である。<sup>13</sup> 詩においては、今世紀初頭では、必ずしも「マタイによる福音書」7章2節の灰めかし(allusion)があるとも限らないとも読める説明だが、灰めかしがあるのが大半ととるべきであろう。

さて、「マタイによる福音書」の問題の箇所を引用する。

Judge not, that ye be not judged. For with what judgement ye judge, ye shall be judged: and with what measure ye *mete*, it shall be measured to you again.

Matthew. vii. 1-2. (下線は筆者) King James Version

欽定訳聖書では、「ルカによる福音書」6章38節にも、同様の教えの部分でやはり、動詞 *mete* が使われている。すなわち、真に量り判断するのは神のみに属することであり、人間が対象を軽々しく量り判断することへの戒め、「繰り返し、繰り返し性急な判断に対する警告が見いだされる」<sup>14</sup> 箇所に動詞 *mete* が使われている。ここには、自然科学の知見が増すにつれて、ひたすらキリスト教を否定する時代の風潮に必ずしも同調していないハーディ、ひいては詩の中の「私」に微妙な距離を置いているハーディが浮かんでくるのではあるまいか。また、*mete* が測る対象を塵(dust)としているが、これには(人間)の遺骨、塵に返るべき肉体の意味が「創世紀」以来あり、英国国教

会の *The Book of Common Prayer* の “At the Burial of the Dead” の祈りなどでも dust が用いられているので、当然ハーディは、この語のニュアンスも利用しているといつてよいだろう。

‘A Sign-Seeker’ は、第 6 スタンザ第 1 行の ‘But that I fain would wot of shuns my sense ——’ 「しかし私が知りたいことは私の感覚を避けている——」に、ほとんど要約されるようでありながら、「私の知りたいこと」あるいは最後のスタンザの第 1 行の前半 ‘And panted for response.’ 「そして反応を切望した」にも、相当の想いが込められた詩として読めるのではなかろうか。

Bailey はこの詩と関連して次のように述べている。

All his life Hardy continued to look for God, “As an external personality, of course—the only true meaning of the word,” he said. If he could not see God himself, he would accept any tangible, visible, or audible evidence of His existence.<sup>15</sup>

このような詩人の一面と、ハーディ自身が、批評家はいろいろと評するが実は自分は churchy と呼ばれるのが合っているだろうと言っていることはもつと考慮すべきことではなかろうか。<sup>16</sup>

‘A Sign-Seeker’ に対するこのようなアプローチの読みは、本稿で挙げた第 2 グループの他の詩にもある程度有効であると考ええる。

《本稿は 1996 年 11 月 2 日に聖徳大学でおこなわれた第 39 回日本ハーディ協会大会で発表したものを一部修正、加筆したものである。》

#### 注

1 J. O. Bailey, *The Poetry of Thomas Hardy: A Handbook and Commentary* (Chapel Hill: North Carolina Press, 1970) pp. 143, p. 147, p. 149, and p. 261.

- Paul Zietlow, *Moments of Vision: The Poetry of Thomas Hardy* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press., 1974) pp. 123–150.
- 2 Samuel Hynes, *The Pattern of Hardy's Poetry* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1961) pp. 34–55.
- 3 Thomas Hardy, *Thomas Hardy: Selected Poems* edited with an introduction and notes by David Wright (“The Penguin Poets” Hammondsworth, Penguin Books, 1978) pp. 230–233, pp. 243–245.
- 4 Thomas Hardy, *Thomas Hardy: Selected Poems* edited by Tim Armstrong (“Longman Annotated Texts” Harlow, Essex: Longman Group UK Limited, 1993) pp. 60–63, pp. 67–69.
- 5 ハーディの「哲学」を説明するために哲学的冥想詩を断片的に引用した例。  
Delmore Schwartz, “Poetry and Belief in Thomas Hardy,” David Perkins, “Hardy and the Poetry of Isolation” いずれも *Hardy: A Collection of Critical Essays* edited by Albert J. Guerard (“Twentieth Century Views” Englewood Cliffs, N. J.: Prentice–Hall, Inc., 1963) に収録されている。Kenneth Marsden, *The Poems of Thomas Hardy: A Critical Introduction* (New York: Oxford University Press, 1969) Chapter IV. “From Idea to Poem”  
ハーディをモダニズムとの関連で論じたもの。  
Herbert N. Schneidau, *Waking Giants: The Presence of the Past in Modernism* (New York and Oxford: Oxford University Press., 1991) pp. 25–63.
- 6 Thomas Hardy, *The Complete Poems of Thomas Hardy* edited by James Gibson (“The New Wessex Edition” London and Basingstroke: Papermac, a division of Macmillan Publishers Ltd., 1981) p. 61. 以下、本稿におけるハーディの詩の引用はこれによる。
- 7 William Wordsworth, “My heart leaps up when I behold,” *The Complete Poetical Works of William Wordsworth* (London: Macmillan, 1888) p. 171.
- 8 “sage.” *The Shorter Oxford Dictionary*, Third Edition, VOL. 1 (1973).
- 9 Frederick R. Karl and Laurence Davis (ed.), *The Collected Letters of Joseph Conrad Volume 1 1861–1897* (Cambridge: Cambridge University Press, 1983) p. 425.  
Marsden は、コンラッドのこの手紙とハーディの思想との関連を述べている。*The Poems of Thomas Hardy*, p. 14.
- 10 sign の神学的意味は、日本聖書協会の新共同訳『聖書』の巻末の用語解説によれば次のとおり、「『奇跡』『しるし』『不思議な業』この三つの言葉は同様の意味で、しばしば一緒に用いられる。いずれも、人間の理解を超える、驚くべきことであるが、神の力とその支配を示すしるしを意味する。」  
sign の神学的意味については、他に次のものを参照した。  
“signs and wonders,” *The Interpreter's Dictionary of the Bible* Vol. 4 (Nashville, Abingdon Press, 1962),

“miracle/ sign/ wonder,” *Expository Dictionary of Bible Words* edited by Laurence O. Richards (Grand Rapids, Michigan: Regency, 1985)

「しるし」, 『新聖書大辞典』(キリスト新聞社, 1971年)

また, 桑田秀延他編, 『キリスト教大事典』(教文館, 1963年)の「奇跡」の項目も参照した。

11 Paul Zietlow, *Moments of Vision*, p.16.

ちなみに, 「ヨブ記」11章7節の前後では, ヨブは「私は(I)」という言葉を頻繁に繰り返し神の力とその支配の見出せないことを嘆く。‘A Sign-Seeker’で一人称単数の主語‘I’が多用されていることと関連させる読みも可能かもしれぬ。

12 J. O. Bailey, *The Poetry of Thomas Hardy*, p.84.

13 “mete,” *Oxford English Dictionary* 1933/ reprinted 1961/1970.

“mete,” *A New English Dictionary on Historical Principles*, 1908.

14 ウルリヒ・ルツ著, 小河 陽訳, 『EKK新約聖書注解』(教文館, 1984年), 541頁。

15 J. O. Bailey, *The Poetry of Thomas Hardy*, p.85.

16 Florence Emily Hardy, *The Later Years of Thomas Hardy* (London: Macmillan, 1930) p. 176.

## Synopsis

# Nature and the Universe for Thomas Hardy

— On his ‘Philosophical Fantasies’ —

Toshimasa Oshimoto

Thomas Hardy wrote more than 900 poems and published nine collections of poems. These are amazing achievements for a man who spent many years and his creative energies as a novelist. His poems are classified by critics under various themes: ‘love poems,’ ‘bird poems,’ ‘ghost poems,’ ‘narrative poems,’ ‘war poems,’ etc..

The purpose of this paper is to examine Hardy’s poems which are called ‘philosophical fantasy,’ ‘philosophical sonnet’ or ‘philosophical and religious meditation’ by J. O. Bailey in his *The Poetry of Thomas Hardy: A Handbook and Commentary* and the poems which Bailey recommended to compare with them. Also these are the poems dealt with by Paul Zietlow in the fifth chapter of his *Moments of Vision: The Poetry of Thomas Hardy* under the heading of ‘Philosophical Fantasies.’ These poems are very idiosyncratic. They deal with nature and the universe quite directly. Sometimes they are highly abstract, and their texture can be rough and stiff.

The reason why I discuss these ‘philosophical fantasies’ is not because they are Hardy’s best poems. Even Samuel Hynes, who pays due attention to these works, judged them to be ‘unsuccessful poems’ or ‘bad poems’ in the chapter headed ‘The Uses of Philosophy’ in *The Pattern of Thomas Hardy’s Poetry*. But these ‘philosophical fantasies’ are very interesting and helpful, because they shed light on the poet’s basic attitudes towards nature and the

universe. They also show his very ambivalent attitude towards God.

The point I want to make is that these 'philosophical fantasies' can be sub-classified into two groups as follows:

First group : 'To Outer Nature,' 'Nature's Questioning,' 'The Mother Mourns,'  
'The Lacking Sense,' 'Doom and She,' 'The Sleep-Worker'

Second group: 'A Sign-Seeker,' 'At a Lunar Eclipse,' 'The Problem,' 'God-Forgotten,'  
'By the Earth's Corpse,' 'New Year's Eve,' 'God's Education,'  
'A Plaint to Man,' 'God's Funeral,' 'A Philosophical Fantasy'

This sub-classification is tentative, but if the poems listed above are read with enough attention, they will reveal the kernel of Hardy's view of nature and the universe.

One of the characteristics of the first group of poems is that Hardy deals with 'nature'. The description of 'nature' in most of these poems is based on the scenes in Hardy country which the poet experienced keenly through his senses. In 'Doom and She' and 'The Sleep-Worker' there is no description of nature directly felt by Hardy's perception. But these poems have another characteristic in common with other poems of the first group: nature is personified as a woman, a mother or a knitting woman with no or weak eyesight, except in 'Nature's Questioning' in which nature is expressed as a child chastised in a school. The personified mother is nature herself, and also she bears all kinds of creatures perpetually.

Nature personified as a 'mother' is incompatible with the Christian view of nature. According to Christianity, everything under the sun is created by the Creator, God. But it seems to Hardy that every animate creature is borne by the personified mother. 'Time' and 'Doom' probably intervene between the

'nature' personified as a 'mother' and God. If 'To Outer Nature' is compared with William Wordsworth's 'My heart leaps up when I behold', it will be understood that the phrase 'iris-hued embowment' in the former poem implies Hardy's negative attitude against the possibility to feel the existence of God through nature. Hardy uses 'iris-hued embowment' instead of rainbow because the latter has connotation of God's blessing to Noah and the covenant between God and him after the Deluge in Genesis.

The mother who grieves appears repeatedly in 'The Mother Mourns,' 'The Lacking Sense,' 'Doom and She,' and 'The Sleep-Worker'. Nature personified as the mother utters a 'dirge-like refrain' in 'The Mother Mourns' because man who has become very wise recently 'annunciates' the defects to her. Man is very proud and insists that he will be able to produce 'a creation/ More seemly, more sane' than hers if gods lets him use material and methods. The mother regrets that she has inadvertently let human beings grow more and more uppity. The weak, grieving mother seems to have fallen into dotage. Human beings' strength and intellect are repeated in this poem, but such expression as 'the sage' used for man has ironical connotation. On the surface, the poems in which this grieving mother appears seem to express an attitude against Christianity or the decline of faith, but one aspect of them is the reflection of Christianity: that nature was and is created by some power of the Supernatural.

The other personified image of nature as a knitting woman is very idiosyncratic. She continually knits various things, but she is sightless or she sometimes falls into coma. Therefore, although she is deft at creating things, she is not able to produce a beautiful, harmonious embroidery based on design. What she produces is a strange mixture of 'fair growth' and 'foul cankers,' 'right' and 'wrong,' and 'victim-shriek' and 'song.'

If readers compare Hardy's expression of nature as an eyeless or senile knitting woman with Joseph Conrad's figurative expression of the universe as a knitting machine in his famous letter to his friend Cunninghame Graham, they will understand both writers much more deeply. While Hardy tends to distinguish nature and universe, Conrad finds no distinction between the two. The knitting machine is very huge, strong and pitiless. It doesn't become old nor grieve.

The poems of the second group, which deal directly with the universe and the absolute, are more abstract. It may be said that they are rather clumsy or they repeat similar themes too often. But it is because of the idiosyncrasy of Hardy that he had to write these poems in the Victorian age when the development of natural sciences and secularisation was going on.

God of masculine image appears in these poems. All living creatures, including mankind, on the earth and the earth itself are supposed to have been created by God in these poems. But the question about providence is raised, because God in these poems does not seem to guide and care for his creatures powerfully and encouragingly through history. God is already very old and senile. In 'God-Forgotten' God forgets almost completely that he once created the earth and the human race. Asked earnestly and severely by 'I' in the poem, God does recall, but dimly. There is even a poem entitled 'God's Funeral' in *Satires of Circumstance*.

Poems of the second group reflect the age when the 'death of God' began to be mentioned. However, close reading of these poems will reveal Hardy's very ambivalent attitude and the double levels in them. On one level Hardy's almost substantial denial of Christianity is expressed, on the other level his reluctance to relinquish his faith comes out covertly. In other words, the world seems for the poet to be dominated only by chance, fate and meaninglessness.

But at the same time, another aspect of the poet who wants to seek something more appears. This aspect reveals a Hardy who prefers the age in which people can believe to one in which they can't. To appreciate the second aspect, it is necessary for readers to pay attention to minute expressions, especially the words and phrases based on the Bible.

To illustrate this, I have shown my reading of 'A Sign-Seeker' from *Wessex Poems* in this paper. On the surface level, this is the poem which denies God's rule and power through the experiences of the poet's persona 'I', who has sought 'sign' for years. The persona becomes agnostic. The last line of the poem recapitulates the theme on this level: 'And Nescience mutely muses: When a man falls he lies.'

But a completely different interpretation based on the deeper level of the poem is possible. Hardy must have known well that the Bible contains some stories which teach that a sign is not given to people when they seek it challengingly, for example Matthew xii. 38-39. Hardy implies it is natural that 'I' in the poem can't find a sign, for he is too ardent and challenging.

Other delicate uses of biblical expressions by Hardy are found in the fourth stanza. After enumerating the developments of physical sciences, Hardy writes thus in the fourth line: 'To mete the dust the sky absorbs.' Although this line seems merely to show a modern, scientific man's ability to know every thing by a positive, quantitative method, two words are very ironical.

'To mete' as a transitive verb means, according to *OED*, 'to ascertain or determine the quantity of,' and it is very often used as allusion to Matthew vii. 1-2: 'Judge not, that ye be not judged. For with what judgement ye judge, ye shall be judged: and with what measure ye mete, it shall be measured to you again' (King James Version). This text of the Bible is a warning to people who tend to judge hastily or on self-deceived assurance. The word

‘dust’ is ironical, too. It is ‘a finely powdered earth or other material, etc.’ But, in more metaphorical sense, it is ‘dead person’s remains,’ and it is often used in Genesis and other books in the Bible and *The Book of Common Prayer*.

Close reading of ‘A Sign-Seeker’ reveals a Hardy whom Bailey, in his comment on this poem, describes thus: ‘All his life Hardy continued to look for God.’ Probably readers will be reminded that Hardy calls himself ‘churchy’ in *The Later Years of Thomas Hardy*.